

## 『白い船』

(2002年公開)

※DVDレンタル・販売あり

小さな漁村の小学生と大型フェリーの  
心あたたまる実話が原作

タイトルからして心惹かれる映画だ。「白い船」は2002年公開直後からクチコミで広がり、同年ミニシアター邦画全国興行成績1位を記録した日本作品である。

2日に1回2時限目  
水平線の彼方が光る

静香は、鳥根県の小さな漁村の岸壁に建てられた全校生徒17名の小学校に赴任して2ヶ月。バスや電車を乗り継いで毎日通っている。学校にも父兄にも村にも慣れてきた、と言いがらも、本心は教師という仕事への悩みでいっぱいだ。そんなある日、受け持っている5・6年の合同クラスの男子児童が、教室の窓から見える海で「船を見つけた」と言い出した。水平線の彼方に白く光る何かは、裸眼では大きさも、

そもそも船だかもわからない。子供達の声に耳を傾けた静香は、船のことを教師たちに聞いてみるが、「たぶん漁船だろう」と話を真面目に取り合ってくれない。子供達は教室に大きな双眼鏡を持ち込み、窓から見える白くて大きくて2日に1回、2時限目の授業中に見える船に、学校中がどンドン夢中になっていく。校長先生がついに白い船の正体突き止める。白い船はフェリーで、新潟の直江津港から博多港までの北前航路だった。全長196メートル、ホテルのような設備。校長先生からもらった「れいんぼう・らぶ」のパンフレットに、子供達の白い船への好奇心はますます高まっていく。静香の提案で、フェリーの船長あてに手紙を書くことにした。内容は船に関する疑問。船長からの丁寧な返信、子供達も先生も大感激する。

され、「ニューゴールデンブリッジ5」と改名。現在も仁川・青島航路を就航している。

映画に登場した白い船は「れいんぼう・らぶ」だけが、当時子供達が眺めていた白い船には姉妹船「れいんぼう・る」もいた。その後を追ってみると、「ニューれいんぼう・らぶ」就航に伴って売却された後「フェリーひむか」と改名し、大阪貝塚・宮崎日向航路を運行。マリンエクスプレスから宮崎カーフェリーに運営会社変更した直後、映画「LIMIT OF LOVE 海猿」(2006年公開)に「くろーばー」号として出演を果たしている。現在はさらに名を変え「アリアドネ」となり、ギリシャの会社に売却され、ピレウス・ヒオス島・ミティリーニ航路を就航している。

フェリーと客船の  
違いをおなわらい

今回の映画で登場する船はフェリーだが、ここで客船とフェリーの違いを明確にしておこう。

客船、特にクルーズ客船は船旅そのものがレジャーであり、船で海上ライフを楽しむためのサービスを提供する船を指す。食事やエンターテインメント、イ

映画公開後も続いた  
塩津小学校との交流

鳥根県平田市(現在は出雲市)にある塩津小学校の実話をもとに書かれた、倉掛晴美著「海の子の夢を乗せて」(2000年刊行・石風社)が原作。映画は2001年夏から撮影を始め、2002年夏に公開だが、実際の子供達と白い船との出会いは1998年6月のこと。その頃は毎日10時30分に塩津沖のはるか向こうを航行するイルカマークの白い船が見えていたという(同年9月から隔日運行)。

子供達が当時の船長あてに送った本物の手紙は、九越フェリー博多支店に届いていた。映画の中にも登場した「れいんぼう・らぶ」のパンフレットにあった住所に送ったのだろう。内容は5年6年が社会科で学習する「運輸」についての質問で、支店職員が配慮して返信。そのことを知った大西船長は自ら丁寧な返信を送り、子供達と親睦を深め始めた。船内には「塩津小学校コーナー」を作り、子供達が制作した壁新聞をはじめファクスや手紙などが

ベント、ショッピング、ビューティー施設やフィットネス施設などを備えている。飛鳥II、つぼん丸、ばしふいっくびいなど、古いところで言えば、ふじ丸、新さくら丸、おりえんとびいなど、該当する。

フェリーは、乗客、車や貨物に乗せて運ぶ定期船のことである。英語で「渡し船」を意味し、広義で捉えると客船の一つであるが、貨客船と言った方がしっくりするだろう。日常の交通手段であり、元来は観光客用ではないが、最近では個室、レストラン、大浴場もあり、催しができるスペースがある、クルーズ客船と遜色変わらないような豪華フェリーも増えている。大きな違いは、フェリーは定期船なので、もしも乗客がゼロであっても運行されるということ。水川丸など昔の客船はほとんどが、貨客船であったと言えるだろう。

海への憧れは  
船への憧れに続く

映画「白い船」を見たあと、つい口ずさんでしまいたくなる歌がある。

海は広いな 大きいな  
月がのぼるし 日が沈む

海は大波 青い波



白い船を発見した小6男子は子役時代の濱田岳

揭示。小学校でも揭示はもちろんのこと、船が通過する日は旗を上げたり。映画でもその様子が再現されている。

映画のエンドロールに「塩津小学校と九越フェリーとの交流は今も続いています」と書かれてあるように、「れいんぼう・らぶ」から「ニューれいんぼう・らぶ」に代替わりしても、九越フェリーから東日本フェリーに運行会社変更になっても、交流は続いていた。船内の「塩津小学校コーナー」は「ニューれいんぼう・らぶ」にそのまま移設。塩津小学

ゆれてどこまで続くやら

海におフネを浮かばして  
行つてみたいな よその国へ

大らかで優しい歌詞とメロディに、大海原を思い浮かべるこの歌は、ご存知、「うみ」(作曲は井上武士、作詞は童謡詩人の林柳波)。尋常小学校が国民学校と変えられた1941年(昭和16年)の2月、初等科1年生用の音楽教科書「ウタノホン上」に掲載するためにつられた二曲だ。

初掲載の年の12月に真珠湾攻撃があり、「子供達への軍事教育」が制作の背景にあった中、戦争反対派の柳波は工夫を凝らして作詞。現在もそのまま歌い継がれている。幼い子供が海を見た時の驚きと感動をそのまま詩にしたような素直な歌詞のヒントになつたのは、父親になつた柳波がよく家族で出かけたという逗子の海で遊ぶ我が子達の姿。「うみ」は、現在も文部省唱歌として小学校1年の音楽教科書に掲載され、「海洋政策研究財団」が2001年に調査した「21世紀に残したい海の歌」アンケート調査で1位に輝いている。

(クルーズ映画ライター あいさわみき)

